

第二章 中国の現実

1 満州と中国

歴史を憂える日本の識者は、「紫禁城の黄昏」を読み直せと言う。これは一九三四年に出版され、何よりも当時を伝える事実があふれているとも云われている。政治家も官僚も教育者なども思い込みを修正するためにも精読すべき書かも知れない。

左翼的な出版社と言われる、ピクター・ゴランツ社から出版された「紫禁城の黄昏」に書かれていることは、あの当時シナで起きた真実の歴史だと言う。そう言えばあの時期に書かれた、まとまった資料の存在があまり公表されたことはなかった。

その意味でも、最も信じられるものと言えるのかも知れない。何故なら日本擁護のために書かれたものではないことが明らかであるからである。

当時シナでは、満州を奪う「滅満興漢」を叫んだ革命が起こり、満州最後の皇帝と言われた溥儀は紫禁城から追っ払われた。その皇帝が最初に頼った英国から日本公使館に助けを求め、父祖の地である満州に戻って皇帝になりたいと思うのは当然であろう。

最後の皇帝、溥儀を支援したのが日本であり、当面、統治能力のない溥儀政権を日本が支援したとしても、それは自然の成り行きでしかない。

その満州を守る為に戦った日本が、戦後言論統制が解けたあとも反論しないばかりに、一方的な悪者にされているが、日中戦争はそこから拡大したもので、日本が本意としない戦争になだれ込んでいったのが真相と云うことになる。

日中外交には、中国の前提がある。彼らは日中戦争という「国家の戦い」を曲げて日本を、「侵略国家」だとしてきたが、この著書を読むかぎり、それが誤りであることが明らかである。彼らの云う決まり文句、「歴史を正しく認識して」は、実は日本が言うべきセリフであることが現実のものになってきたのである。

中国が偽造した田中上奉書は、昭和2年、当時の田中首相が、昭和天皇に報告した様を装い、日本の大陸侵略意図の証拠としてきたもので、中国の対日歴史の根幹を為すものであったが、「南京事件」と同じようにこれも「セモノ」であることがわかった。

田中上奉書には、あり得ない日付が記されるなど事実関係の誤りが多く、日本では当初から偽文書としていたが、中国が本物として広めてしまったと言われている。

偽造の田中上奉書事件でも分かるように、中国の日本批判の材料は悉く捏造されたものであり、如何に中国が戦略的な国家であるかが分かるうというものである。

書には「世界を征服しよう」と欲せば、まず中国を征服しないわけにはいかない。これは

明治天皇が遺した政策である「などと書かれており、昭和4年には英語版やロシア語版にも現れたという。中国は日中戦争以前から常に日本を敵視していたことが分かる。

巧妙なニセモノは素人には判りにくく、欧米に広まったのも中国の戦略であろう。中国は早い時期から日本を戦争に誘い込んでいたという見方ができる。日本は「宣戦布告」と同じ挑発を受け、中国に対する感情が悪くなっていったことが分かる。

歴史の偽装を認めざるを得なくなった中国は、最近になって中国政府直結の研究所長も誤魔化しきれず「存在しなかったという見方が主流になりつつある。そうした中国の研究努力を、日本側は知っているのか」と、まるで日本の責任でもあるかのような言い方をしているという。盗人猛々しいとは、まさに此のことであろう。

そこに謝罪はなく開き直った態度にあきれるが、中国人を必要以上に醜く見せ、彼らの本性が現れているとも言えるのである。

偽文書だと分かっているなら、「反日」教育に使われている教科書から削除し、日本批判を止め、即刻日本に謝罪すべきであろう。

偽文書が出回った可能性のある英語圏や、ロシアなどにも、訂正文書を発信するのが、道義と言うものであり、中国に「ないものねだり」は無理だと分かっているも腹立たしく彼らが行動しないのであれば、日本が行うしかないのである。

中国は悪質な偽造文書を恥ずかしげもなく作成し、日本に様々な罪をなすりつけようとしてきたが、その原則が消えた。この始末は注目に値するものと言えよう。

中国は「南京大虐殺」の作り話にしても、「抗日記念館」の、百人切り競争の蟬人形にしても、自作・他作を問わずニセモノで溢れかえっており、信じられるものが何もないと言われているが、全てにおいて歴史検証をやり直すべきであろう。

侵略された国に、日本が侵略者としてののしられているのである。「元寇の侵略」の子孫が謝罪しないかぎり「日中友好」がニセモノであることを弁解する余地もなく、その多くが日本の責任ではないといえるはずである。

何かあるたびに、「日本の歴史認識が問題だ」と主張する中国の若者たちは、「文革中の紅衛兵たちのように自分が市中を引きづり廻して殺した相手がどういう人かも分からず、迫害に加わっていた」と言っが、その相手が日本に変わっただけであろう。

何処かで読んだその表現がことの他似つかわしいが、日本にとっては重大な事実であることにはわりはない。自らの先祖が日本人虐殺を行った歴史、「元寇の侵略」を謝罪していない民族であることを彼らにこそ教えるべきである。

親中派が、「日中友好」が重要だと言い、「アジア外交を、小泉首相が壊した」と叫ぶが、中国外交が如何に偏ったものであったか。事の本質を見ようとしない戦後政治家の太平洋志向は、「歌を忘れたカナリヤ」のように物悲しい。

多くの日本人がメディアに影響されているように、中国人もそれ以上の洗脳を受けて「反日」中国人に成長していくのである。日本は、二重の批判に曝された、世にも珍しい「反省国家」へと転げ落ちてきたのである。